

**山鳥坂ダム・鹿野川ダム環境検討委員会**  
**第7回動植物の保全に関する専門部会**  
**議事概要**

日 時 平成25年12月11日 13:00～14:30  
会 場 山鳥坂ダム工事事務所 鹿野川ダム管理庁舎 会議室  
出席者 松山東雲短期大学 名誉教授 松井宏光氏

**1. 山鳥坂ダムにおける環境影響評価及び保全措置の経緯**

- ・ 愛媛県のレッドリストが更新される予定である。新しいレッドリストが公表された場合は、重要な種の更新を行い、対応を検討する必要がある。

**2. 山鳥坂ダム現地調査結果の概要**

- ・ 水田の蘚苔類について保全すべき重要な種が確認された場合は、新たな課題となる。
- ・ タチハコベは愛媛県で絶滅危惧 IA 類にランクされている種であり、県内での生育数は少ない。今回調査で確認された地域は、県内で最も多く生育する場所と考えられる。
- ・ ムヨウラン属の一種は開花を確認できず同定できなかったが、クロムヨウランと同定できた場合は、愛媛県のレッドリストに記載されることになるだろう。クロムヨウランは四国のいずれでも貴重な種である。
- ・ メヤブソテツ、ホシクサ、フトヒルムシロ等は、愛媛県レッドデータブックで準絶滅危惧種に指定されているが、現状では多く見られる種である。フウランは愛媛県レッドデータブックで絶滅危惧 II 類、イワヤシダは、絶滅危惧 IB 類であるが、各々県内に点々と生育している。
- ・ コバナガンクビソウは愛媛県レッドデータブックには記載されておらず、県内では珍しい種ではない。
- ・ 対象種の希少性に応じて保全にかける努力量を変更することも検討しても良い。

**3. 山鳥坂ダムにおける植物保全措置の経過及び今後の保全措置の検討**

**3.1 保全措置の検討結果について**

- ・ キンラン、ウスギムヨウランの「確認地点数・個体数が多い」というのは主観的な判断になるのではないか。
- ・ 調査区域内の分布状況だけでなく、公表されている愛媛県内の分布や四国での分布状況についても整理しておくことが望ましい。私の所有しているデータも提供できるので、客観的な資料を整理しておいたほうがよい。
- ・ キンランは移植手法が確立したと言ってよいが、ウスギムヨウランは移植手法が確立していると言い切るにはまだ早いと思われる。根茎の伸長や新たな個体の生育等が確認される必要があると思う。
- ・ カビゴケ、セトヤナギスブタ、イヌアワのグループは、直近の工事により改変を受ける種で、移植等の手法が確立していないが、改変区域外にも個体が残ることから移植等の実験を進めることで了解する。

- ・ 実験では失敗も考えられるため、改変されない生育地の確保や種子の保管等、バックアップをしておくことが重要である。
- ・ ヒメウラジロ、コシロネ、ホシクサ、ユキモチソウは、既往の検討により保全措置対象種となっているが、県内では南予地方に多く生育していることが確認されている。今後、保全措置対象種として残すか再検討しても良い。

#### 4. 山鳥坂ダム 平成 25～26 年度の移植等計画

##### 4.1 イヌアワ

- ・ イヌアワは愛媛県レッドデータブックにおいて絶滅危惧 IA 類にランクされているが、近年、生育地が多く確認されている。
- ・ イヌアワの移植手法や移植時期は問題ない。おそらく、かなりの確率でイヌアワは活着するだろう。
- ・ 湿性圃場に移植するスペースが不足するようであれば、移植個体数を減らしても構わない。
- ・ イヌアワの移植は難しくないが、移植後に維持管理を継続することが課題となる。

##### 4.2 セトヤナギスブタ

- ・ セトヤナギスブタは、愛媛県内において生育が少ない種である。
- ・ アクアリウムで栽培している人もいるので、育苗はそれほど難しくないと考えられる。
- ・ 室内播種の育苗個体は別の圃場か水槽などで生育させたらどうか。表土の撒き出しや直接播種による個体の再生産が行われるかどうかを確認するためにも、育苗個体が混じらないようにすること。

##### 4.3 ミズオオバコ、ミヤマミズ、カビゴケ、ミズスギモドキ、ムヨウラン属の一種、ゴマギ

- ・ これらの種の移植等の手法は提案の内容で良い。
- ・ なお、ミズオオバコは溝にも生育する非常に強い種であるが、移植は難しいため留意すること。また、ミヤマミズは、他の植物による被圧に弱いこと留意すること。

##### 4.4 ミズキカシグサ

- ・ ミズキカシグサは非常に重要な種であり、愛媛県ではまだ 1 箇所でしか生育が確認されていない。
- ・ 湿性圃場内において再生産が 2～3 年の間確認されれば、移植は成功していると言えるだろう。
- ・ 平成 25 年度の生育状況に応じて、平成 26 年度は再生産をしている場所では直接播種はしないなど、再生産個体と播種または移植した個体とが区別できるようにしたほうがよい。

##### 4.5 今後の保全措置について

- ・ 山鳥坂ダムの事業において移植等の知見が蓄積されれば、今後の大規模公共工事の際に貴重な参考事例となる。県内の他事業においても、セトヤナギスブタやムヨウラン、イヌアワなどが改変にかかる可能性があり、移植等の対応が必要とされている。
- ・ 今後、保全措置を継続して実施すると、湿性圃場は手狭になるだろう。地域の方、NPO、学校教育等と連携して、昔ながらの水田を営むことで湿性植物が生育できる場を創出し、保全していく仕組みを検討する必要がある。自然観察会等とあわせて実施していけば、人は集められると思う。
- ・ 富郷ダムでは土捨て場の活用としてビオトープを造成しているが、以前いなかった希少種が

見られるようになった。

- ・ 自然に影響を及ぼすダム事業ではあるが、同時に希少な生物などの自然を残していく新しい使命が加わってもよいかと思う。

以上